

太古の音に耳を澄ます — 縄文の響き —

高橋 和奈枝

長野医療衛生専門学校 音楽療法士学科

はじめに

なぜ音楽なのか。音楽療法の意味を考えるにあたって、常に問われる疑問である。この意味を問いただすと、「そもそも音楽はいつ誕生したのか」「生存に関わらないものは進化の過程で淘汰されていくなかで、音楽は今に至るまでなぜなくならなかったのか」と音楽に関する根源的な問いに行きつく。本学科の授業科目である音楽心理学においても、どちらの問いも扱っており、学生とともに考えている。本稿はそんな答えのでないような問いへの手がかりを探究すべく、文字以前の社会の音・音楽を訪ね、見る・聴く・感じる旅を記述した。

縄文時代の楽器に魅了されて

本学科の授業科目に日本音楽史があるが、日本音楽史のテキストと言え、雅楽などから扱うものが多い。しかし、本学科では先史時代や縄文時代の音や音楽から扱うテキストを採用している。長野県には縄文時代の遺跡が多く、それらの遺物が展示された考古館などを訪れると実際に楽器と思われるものに出会うことが多い。音楽家の土取利行が縄文の「三種の神器」と呼んだ土器鼓・土笛・土鈴には、ほとんどの考古館で出会うことができ、次第に縄文の人々がなぜ楽器を作るようになったのか、なぜ音や音楽を必要としたのかなど、

縄文時代の楽器に魅了されるようになった。今回は「三種の神器」のうち、もっとも素朴な土鈴に注目しようと思う。

土鈴を見る

まず土鈴と聞いてどんな形状を思い浮かべるだろうか。これまで考古館などで見てきた土鈴は発掘された地域にかかわらず、ほぼ同じ形状で、ゴルフボール大の密閉の球形であり、中に小さな粒が入ったものだ。現代の鈴というよりは、音楽療法でもよく用いるタマゴの形をしたマラカスに似ている。このタマゴの形のマラカスは小さな子どもの手でも握りやすく簡単に音が出るため、筆者もよく使う楽器の一つである。縄文の人々がすでに同じようなものを作っていたと思うと感慨深い。諏訪郡富士見町の井戸尻考古館には曾利遺跡で発掘された縄文時代中期の土鈴と土笛が並んで展示されており、楽器コーナーを見て楽しむことができる。土鈴には「米つぶ大の小石が入っていて振るとシャラシャラと鳴る」と解説が加えられていた。表面に模様は施されていない、土を丸め、中に小石を入れたシンプルなものであった。解説を読んで、シャラシャラという音に興味を持ったがここではショーケースの中に収められているため、音は想像の範囲で楽しむのみであった。

土鈴を聴く

土鈴の実際の音を初めて聴いたのは、山梨県笛吹市にある釈迦堂遺跡博物館である。ここでは4個の美しい土鈴の展示の横に、「縄文の音」というコーナーがあり、ボタンを押すと録音ではあるが、実際の土鈴の音を聴くことができる。土鈴は釈迦堂遺跡から発掘されたもので年代はやはり縄文時代中期である。いずれも表面に美しい模様が施されており、渦巻き模様にドットの入ったもの、プレーンなストライプ、大きな横縞の中に細かな縦縞の入ったもの、大きな横縞の中にプレーンと細かな縦縞の入ったものが交互の模様になっているものがあった。4個の土鈴の後ろにはエックス線写真があり、それぞれ密閉の土鈴の中身も見ることができる。小さな球が詰まった状態で3~4個入っている。見るだけでも面白いが、実際に音を聴けるとするのが嬉しい。

気になる土鈴の音だが、印象的には「シャラシャラ」というより、「カチカチ」とか「カリカリ」のような感じがした。丸い小石をこすり合わせたような音というべきだろうか。どんな風に鳴らすと良い音が出るのだろうか。音を聴くことで、実際に鳴らしてみたいと思うようになります興味が増えた。

土鈴を感じる

気ままに縄文の考古館や博物館を巡っていたが、実際に土鈴を手を持って鳴らす機会は突然訪れた。北佐久郡御代田町にある浅間縄文ミュージアムでお土産としてレプリカの土鈴が売っていたのだ。レプリカではあるが、手に取る感覚や何より実際に自分で鳴らせることが嬉しい。想像通りの手に馴染むサイズで、実際に振ってみると「コロコロ」と良い音がした。音が響くように密閉ではなく共鳴孔が開けられているなど、多少アレンジがされているが、耳元で鳴らしたり、いろいろな振り方

をしたりして楽しめる。「コロコロ」という音を聴くだけで笑顔になれるのを自分でも感じ、楽器として目的を持って作られたことが実感できた。

また、土鈴を実際に作る機会にも恵まれた。茅野市にある尖石縄文考古館では個人の体験学習として土鈴作りが体験できる。尖石縄文考古館は国宝の「縄文のビーナス」や「仮面の女神」などの土偶で有名な考古館であるが、少し変わった土鈴があることにも注目していた。長峯遺跡で発掘された縄文時代中期前半の「内部に粒が入っている顔面把手」である。土器の把手として作られたものであるため、おそらく土鈴ではなかっただろうと考えられるが、空洞の内部に粒が入っていて振ると音が鳴るといふ。体験学習では、この顔面把手用の土鈴を作ることができた。実際に作ってみると、まず中に空洞を作ることが難しい。また粘土であるため、密閉にすると内部の粒が壁にくっついてしまい音が鳴らないため、孔を開ける形で作ったが、それでも粒が中で自由に動くようにするのはなかなか難しい。縄文の人々はそれでも手に握るサイズで振ると音が鳴る楽器を作り、その楽器が同じような形で様々な地域から出土していることから、当時の生活や儀式などに必要なものであったのだろうと考えられる。自作の土鈴は振ってみると「カチカチ」や「カリカリ」に近い釈迦堂遺跡博物館で聴いたあの音が響いてきた。

太古の音に耳を澄ます

土鈴が何のために作られたかはわかっていない。それでも、美しい装飾や手間をかけて作られた遺物を見ると大切にされていたことが伝わる。土鈴の音は密閉の形状からも想像できるように小さく素朴な音だ。それでもその小さな音に耳を澄ますことで、太古の昔から人々が音や音楽を必要とした感覚に身を浸すことができる。

なぜ音楽なのか。太古の音を探究しながら考えていきたい。